

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
「自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成」 ・意欲的に学び、チャレンジする子ども（知） ・自他を大切にし、思いやりのある子ども（徳） ・心身を鍛え、活動的な子ども（体） 全ての教育活動で「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成を目指す。		○肯定的な評価を基盤とした教育活動を実践したことで、児童にとって学級や学校が安全・安心な居場所となっている。 ○行事等において児童の発想や挑戦を大切に指導したことで、児童同士の繋がりが深まり所属感や一体感が高まった。 △特別支援教育を中心に多様な課題への支援、関係諸機関との連携による保護者・家庭支援を強化する。	「夢いっぱい 笑顔いっぱい 一人一人が輝く楽しい学校～生きる力を培い、未来を創造できる児童の育成をめざして～」 ・少人数のよさを生かし、確かな学力をつける教育の実践 ・信頼される学校づくりの推進 ・郷土を愛し、郷土で学ぶ教育の実践
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）
学校教育指導の重点、 保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	○算数科を重点研究とし児童の意欲や主体性、見通しを引き出す指導、探究的な学びに繋がる手法について研究を進める。 ○「やってみたい」「できた」「わかった」を大切に実践し、学習意欲の向上を図る。 ○一人一人の学習内容の定着を把握するとともに、自らの指導を振り返り、改善に生かせるような評価の工夫を図る。 ○各種調査を基に「主体的・対話的で深い学び」「探究的な学び」の視点から整理分析し、改善に向けた取組を推進する。	○授業改善や授業観の転換を図るため、市や局から講師を招聘したり、市の学力対策会議に参加したりしながら教員の学びを深めることができた。特に学園の取組（3Cプロジェクト）を基に、自己調整学習や児童主体となる授業についての共通認識を図り授業実践を積み重ね、授業力を高めることができた △各種テスト・質問紙等から個の学力課題を整理し、より個別最適な学びや協働的な学びにつなげ授業改善を図る。
	生徒指導	○生徒指導の4つの視点による学級づくりを進め、児童相互及び教職員との好ましい人間関係を育成する。 ○豊かな人間関係を育むために、異年齢活動を進める。 ○日々の子どもたちの様子を全教職員で見守り、情報交流を丁寧に行うことで、「いじめ」や「不登校」の芽を逃さない。 ○多様な考えと触れる「考え議論する道徳」へと質的転換を図り、多角的・多面的な見方へと発展させる等道徳教育の充実を図る。 ○児童の状況把握に努め、SCやSSW等外部機関と組織的に連携し、いじめや不登校の未然防止を図るとともに、教職員の対応力を向上させるため研修の機会をもつ。	○大きな問題事象や重大ないじめ等もなく、学校が安定している。 ○3つのC(chance・challenge・change)を合言葉にすることで、目指す方向性がわかりやすく取組の活性化に繋がった。 ○各行事や取組等において異年齢活動を意図的に組み入れることで児童の繋がりが深まり所属感や一体感を高めた。 ○不登校傾向の児童が見られたが、丁寧に素早く家庭と連携しながら対応することで、改善が見られた。今後も各機関や家庭と丁寧に連携し指導を続けていく。 △評価を含め「考え議論する道徳」の時間となるよう教員の研修が必要である。 △家庭状況を背景とした個々の課題が大きく、引き続きSC・SSW各関係諸関と連携し改善構想を立て協議・共有していく必要がある。

健 康 （ 体 育 ） ・ 安 全	・健康の保持増進と体力の向上を図るとともに、様々な取組を通して粘り強く活動する心を育てる。 ・安全・安心な生活を営むための対応力を育成する。	○運動の楽しさや喜びを感じさせる授業や活動を行うとともに、苦手なことでも粘り強く頑張ったことが「よかった」と実感できる取組を仕組み、自尊感情を高める。 ○安全指導・避難訓練の改善を進め、心の面でも身体的な面でも危機回避ができるよう育成する。 ○食事や睡眠の重要性を学ぶ機会を設定するとともに、保護者の協力を得ながら健康的な生活習慣を育成する。 ○大宮学園の取組と連携させ、望ましい生活習慣の確立やゲーム SNS 視聴との課題について学習の機会を設定する。	○休み時間は多くの児童が異年齢で体育館やグラウンドで遊ぶ姿が見られる。運動が得意な児童も苦手な児童も自分らしく挑戦する姿が見られる。 ○健康安全に関する指導や取組を進めることはできたが、危機回避能力を身に付けるまでには至らなかった。 △いつでも、どこでも、誰にでも気持ちよく挨拶ができる児童を育てたい。 △基本的な生活習慣に課題のある児童が固定化している。特に、ゲーム・SNS 等の改善に向けて継続的な取組を行うとともに家庭との連携を図る。
特別支援教育	・特別支援学級を中心にした教育活動を全校的に進める。 ・支援を必要としている児童に対して、組織的な対応を進めるとともに、児童理解の力量を高める。	○特別支援教育に関する研修を通して、全教職員が専門性を身に付け、多様な児童の個性に応じた教育を実践する。 ○特別支援コーディネーターを中心に児童支援に係る部会を定例化し、現状や課題・手立て等について協議する中で、よりよい指導支援のあり方を探り、実践する。 ○保護者との面談を定期的に行い、児童の特性とともによさや成長を確かめ合う中で、合意形成に基づく支援を進める。	○学園で統一した様式でアセスメント等を行い、全教職員で交流することで支援の在り方を確認し、学び合うことができた。 ○△児童支援部を中心として安定した支援を継続することができた。個に応じた支援の在り方について研修を進める。 △定期的な面談だけでなく日常的に伝える中で信頼関係を築き、学校と家庭で支援の共有や見通しをもつことを大切にする。
情報活用能力（ICT活用）	・授業における使用から質の高い活用に高めるための研究を進める。 ・タブレット端末等 ICT を積極的に活用し、学習意欲の向上や授業づくり、学力向上に向けた指導方法を工夫するとともに「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、授業改善を図る。	○ICT 等を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報をわかりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりする学習を行う。また、情報機器の基本的な操作の習得やプログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティについても学ぶ機会を設定する。 ○個別最適な家庭学習を推進し、個々のニーズに合わせた学習活動を展開していく。 ○実践を発信するとともに、研修の機会を増やす。	○発達段階に合わせて ICT を活用した授業を工夫することができた。特に高学年は、思考ツールを活用して整理・分析する力を身に付けることができた。 ○振り返りや情報をまとめる手段として ICT を活用する学年が増えた。 △授業や家庭学習での効果的な ICT の活用が課題である。市が導入しているアプリ等の活用を進め、「自己調整力の向上」を目指す上での効果的な ICT 活用のあり方をさらに研究する。
次年度に向けた改善の方向性	・大宮学園として京丹後市保幼小中一貫教育研究会を実施するため、教職員の参画意識を高めるとともに、探究的な学びを踏まえ、自己調整を中心とした授業観の転換を図ることで授業改善を行い、学力向上を目指す。また、自己調整力を高めるための家庭学習のあり方についても、ICT 活用も含め研究し改善を図る。 ・特別支援教育と教育相談を本校の重点課題として位置付け、発達上の配慮や家庭環境の配慮等が必要な児童に対するケアを組織的に進める。 ・全教職員が心身ともに健康な状態で児童の指導に当たれるような職場づくりを進めていく。		